

「こおりやまの米」通信

GOOD RICE DAY
毎月8日は
こおりやま「お米の日」

編集:郡山市

JA福島さくら郡山統括センター (TEL. 024-921-0503)

NOSAI福島中央支所 (TEL. 024-933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (TEL. 024-935-1310)

発行:郡山市農作物生産対策協議会

(郡山市園芸畜産振興課 TEL. 024-924-3761)

毎月8日は『こおりやま「お米の日」』

豊かな自然と気候に恵まれた、県内一のみどころである郡山の美味しいお米をたべましょう！

Vol. 4 中干し・いもち病防除

* 過去の記事は、郡山市ホームページから見るができます。

こおりやまの米通信

検索



1 いもち病対策

～置き苗の処分は終わりましたか？～

葉いもちに罹病しやすい時期になりました。

置き苗はすみやかに処分してください。



【葉いもち予防】

予防防除は地区全体で取り組むと効果が高まります。箱粒剤を使用していない場合、オリゼメート粒剤やコラトップ粒剤5などを6月下旬に散布してください。

【いもち病適期防除にBLASTAM(ブラスタム)活用を】

県では、葉いもちに感染しやすい日を判定するシステムBLASTAM(ブラスタム)を公開しています。感染後約1週間で病斑が発生するので、ブラスタムで感染しやすい日を確認した場合、その1週間後には場を観察し、早期発見に努めてください。

福島県 ブラスタム

検索



【穂いもち予防】

移植時に箱粒剤を使用していない水田では、コラトップ粒剤5(出穂15～10日前)などを使用し、穂いもちを予防してください。ふくひびき等の出穂の早い品種は、散布時期が7月10日前後なので、遅れないように防除してください。

2 中干し

【中干し開始の目安】

有効茎(目標穂数)の8割の分けつを確保したら速やかに開始してください。目標穂数450本/㎡の場合の中干し開始の目安は、坪50株植では33本/株、坪70株植では23本/株となります。*詳しくは前号を参照。

【中干し終了の目安】

田面に幅5mm程度の亀裂ができれば終了です。地力の低い水田では軽く亀裂ができた時点で終了です。減収とならないように幼穂形成期までには終了してください(ふくひびき等の出穂の早い品種では7月上旬から幼穂形成期となるので注意してください)。

3 水管理

【生育不良時の水管理】

有効茎が確保されるまで中干しは実施せず、浅水管理を継続します。異常還元(ガス湧き)の場合、数日間落水を継続し土壤中に酸素を供給してください。

なお、異常還元による生育不良時に、生育促進のために窒素追肥を行うと、回復後に生育が過剰となり倒伏の恐れが高まるので注意してください。

【中干し後の水管理】

中干し後すぐに湛水状態とすると、土中が酸素不足となり根腐れの原因となります。中干し直後は土を湿らす程度の走り水とし、3～5日かけて徐々に間断かんがいへ移行してください。ただし、穂ばらみ期～出穂期は、開花や受粉に備えて水分が必要(花水)なので、湛水管理に切り替えてください。

【気温に応じた水管理】

○幼穂形成期以降の低温

低温により、不稔となることがあります。幼穂形成期から減数分裂期に低温(17℃以下)が予想される場合には、すみやかに幼穂の高さに応じた深水管理とし、幼穂を保護してください。

○登熟期間中の高温

高温により、白未熟粒や胴割米が増加します。高温時には、「昼間湛水―夜間落水」や「飽水管理(ひたひた水状態)」により、水温・地温を下げることで、玄米品質の低下が抑制されます。



令和6年も高温登熟が懸念されていますので昨年度発刊「高温対策特別号」を参考にしてください。

熱中症警戒アラートを活用しましょう

熱中症の危険性が極めて高くなった際にメールにて通知されます。また、同ホームページで各種情報が閲覧できます。



4 追肥

【カリの追肥】

稲穂の強化や根の活性化等による収量増を期待してカリを追肥する場合は、出穂40～30日前に実施します。

ケイ酸カリ(出穂40日前) 20kg/10a、または、塩化カリ(出穂35日前) 7kg/10aが目安です。

ケイ酸カリは、ケイ酸により受光態勢が改善し、登熟の向上等も期待できます。土壌中のケイ酸が不足しているほ場が増加しており、近年、ケイ酸を含む資材を施用していないほ場は、ケイ酸カリをお奨めします。

【穂肥】

～出穂25日前の生育状況で判断～

穂数や一穂着粒数の増加、登熟の向上等による収量の増加を目的に窒素の追肥を実施しますが、この時期は稈長が伸びる時期であり、追肥量が多いと倒伏の原因となります。また、遅れると十分な効果が発揮できないため、品種に応じた適切な時期と量に注意が必要です。表1を参考に、生育が旺盛な場合は時期を遅らせる、量を減らす、追肥を行わない等の対応を検討してください。

※ 基肥一発肥料を使用した場合は原則として追肥は行いません。

表1 出穂25日前(幼穂形成期)の標準的な生育の目安

品種名	草丈(cm)	茎数(本/㎡)	葉色 (カラスケール)
コシヒカリ	65～70	630～730	3.0
ひとめぼれ	60～65	700～750	3.5～4.0
あきたこまち	55～60	520～560	3.5～4.0
天のつぶ	65～70	520～560	3.5～4.0
里山のつぶ	65～70	500～600	3.5～4.0
ふくひびき	65～70	580～700	4.0～4.5

品種別の追肥の目安は表2を参考にしてください。

表2 品種別施用時期と窒素成分量の目安

品種名	施用時期 (出穂前日数)	窒素成分量 (kg/10a)
コシヒカリ	出穂15日前	1～2
ひとめぼれ	出穂20日前	2
あきたこまち	出穂25～20日前	2
天のつぶ	出穂25日前	2
里山のつぶ	出穂25日前	2
ふくひびき	出穂25日前	2～3

出穂期はその年の天候により変動します。出穂までの日数は、幼穂長から推測することができます(表3)。

表3 出穂までの日数の判定方法(コシヒカリ)

幼穂長	出穂前日数	備考
1mm	25日	幼穂形成始期
2mm	20日	
8～15mm	18日	止葉抽出
40～60mm	14日	
80mm	12日	減数分裂期

なお、「ふくひびき」では、収量確保のために幼穂形成期の葉色は、SPAD502値で40(カラスケールで4程度)以上を確保することが推奨されます。基肥一発肥料を使用した場合でも、葉色が薄い場合は追肥を検討してください。幼穂形成が7月上旬から始まるため、遅れないように注意してください。

5 紋枯病対策

近年の温暖化や施肥量の増加により紋枯病が拡大傾向にあり、減収となるほど被害の著しい水田も見られます。

前年発生した水田で多く発生するため、昨年被害の大きかった水田では、発生が見られたら速やかに防除を行ってください。

モンガリット粒剤(出穂28～14日前) 3～4kg/10a

※ふくひびき等の出穂の早い品種では散布時期を逸し易いので特に注意してください。

6 斑点米カメムシ類対策

～定期的な草刈りで全量1等をめざしましょう！～

年間2～3回の畦畔雑草の草刈りで、斑点米カメムシ類の密度が低下します。また、水田の周囲のイネ科雑草が繁茂している雑草地等の草刈りも斑点米カメムシ類対策として有効です。

なお、出穂期前後の草刈りは斑点米カメムシ類を水田内に追い込む場合があるため、出穂10日前までに終わってください。

水田内のヒエやホタルイは斑点米カメムシ類を誘引するので、これらの残草がある場合は、後期剤での防除や手取り除草を実施してください。

農薬危害防止運動実施中！

- ・使用前に必ずラベルで作物名・使用方法等を確認
- ・農薬は施錠して保管
- ・住宅地周辺では事前周知・飛散防止
- ・容器の移し替えは厳禁